

J・W・ルイス著

『共産主義中国における
リーダーシップ』John Wilson Lewis, *Leadership in Communist China*, Ithaca, New York, Cornell University Press, 1963, 305p.

I

周知のように、中国は、1959年から1962年にかけて政治的・経済的に、解放以来最も厳しい試練の時期にままわれたが、今やようやくこの困難な時期を乗り切り、新たな発展の時期を迎えようとしている。こうした困難を招いた原因の一つとして指導上の誤りがあったことは、中国の当局者自身の認めるところであるが、しかしこの困難をとにかくにも乗り切ることができたのは、これもまた中国共産党の指導によるところである。その意味で、中国共産党のリーダーシップに正面からとりくもうとしたルイスの試みは、まことに時宜をえたものといわなければならない。事実、そうした問題意識のもとに、中国におけるリーダーシップの全構造を、1958年から1962年にいたる大躍進、調整の時期に焦点をあてることによって把握しようとしたのが本書である。評者の知るかぎり、これまで中国におけるリーダーシップを正面からとりあげたもの（立場がどうであろうと）がなかったということは、まことに不可解なことといわねばなるまい。本書は、その初めての試みであるというただそれだけの理由からしても注目に値するといえよう。アメリカでの評価は、その点に加うるに、本書が農村の基層組織（人民公社生産隊）におけるリーダーシップの解明を試みた最初のものとして、本書を高く買っているようである。本書の内容の紹介と批評に先立って、本書の構成を示しておく。序言のほかにつぎの9項目からなる。

- (1) 中国における共産党のリーダーシップの技術の発展
- (2) リーダーシップ、エリート向けの基本的な党の哲学と思想
- (3) リーダーシップの概念としての大衆路線
- (4) 党機構
- (5) 幹部組織と党の訓練
- (6) 党の活動と幹部
- (7) 基層における活動の際のリーダーシップ

(8) 党の目標と中国社会

(9) 結論

なお、残念ながら本書の著者については、コーネル大学政治学部の助教授であり、新進の中国研究者であることを知るにとどまる。

II

上記の構成からも察知できるように、著者は、中国におけるリーダーシップの問題を、まず共産党の活動の基礎をなす思想の解明から説き起し、党の活動および組織の基本原則である「大衆路線」、「民主集中制」を党のリーダーシップの中心概念として捉え、さらにリーダーシップの技術、その具体的な適用の状況にまで及ぼんとしている。したがって、この研究は、主として中国での出版物に依拠してなされており、香港での避難民とのインタビューの結果には、参考意見程度の重みしか与えられていない。

序言において本書の課題が、「それによって党の指導者が一般大衆の能動的な反応を引き出し、方向づけようと試みたテクニック」の研究にあるとするとき、そこに著者のいわば基本的な姿勢ともいべきものをみることができよう。中共の政策遂行のためにリジッドに組織化された構造的な諸関係の中で、党の基本的な思想なり、活動原則がいかんか実現されているかをみることが、著者の狙いであるといつてよい。

最初に本書は、中共のリーダーシップの技術の発展の過程を述べる。ことに、毛沢東が諸々の誤った思想を克服するために創り出した指導方法（整風）が、すでに井崗山における闘争を通じて確立されたとする。また、抗日戦争期に形成された統一戦線のもとでの党とブルジョアジーとの関係は、党と労働者・農民との前衛——大衆の直接的な関係（directness）と異なり、間接的な協商の関係（indirect consultation）にすぎず、中共はこの相違に基づいて組織および活動の原理と方法を区別してきた。すなわち、前衛—大衆の関係は民主集中制原理と団結—批判—団結の方法に依拠するのに比して、党とブルジョアジーとの関係は民主主義独裁と非協力者に対する強制と排除の方法に依拠するものであると。中共は現在にいたるまでこの二つの指導方法を使い分けており、ただ後者から前者への色彩を強めているという。きわめてユニークな見解ながら、民主集中制の原理と人民民主主義独裁のこうした区別には疑問がある。

中共の思想については、認識の弁証法的過程、矛盾論

に含まれる問題から、さらに「党性」、「人生観」（ないしは「世界観」）にいたるまで、全体的にこれを把握しようとしている。そうして、いったん共産主義的精神状態に達するならば、それがリーダーシップ的行動を必然化するという。つまるところ、「リーダーシップの心理とリーダーシップの実践のアマルガムが中国のリーダーシップ理論の焦点」であり、両者を媒介するものとして、つぎに大衆路線を問題にする。

大衆路線の工作方法として、まず、「大衆から大衆へ」と「一般性と特殊性の結合」をあげる（毛沢東、「指導方法の若干の問題について」）。また大衆路線の工作方法の4段階、すなわち認識し、集約し、それを大衆のものたらしめ、実践するという道程が、認識の3段階、感性的認識から理性的認識に達し、それを検証するという過程に照応するものであることを指摘する。さらに「マルクス・レーニン主義理論においては、リーダーシップは権力の問題ではなくて、正しい関係の問題である」。かくて、大衆路線にあつては、リーダーシップの方法は、幹部と労働階級との間の継続的・組織的な相互作用の方法である。そこで、党幹部と大衆の間の正しい関係に言及するとともに、大衆路線が幹部と大衆の間の、そして——それが民主集中制と結びつくことによって——党の指導幹部と党員との間の基本的に正しい関係を決定するという。しかもそうした大衆路線概念の根底には、「人民、ただ人民だけが、世界の歴史を創造する原動力である」（毛沢東、『連合政府について』）という前提が存在するのである。ついで大衆路線の工作方法、大衆路線と党の路線の関係にふれたのち、「大衆路線概念の特質は、厳格な指導原理の限界内での状況に応じた柔軟性という両者のバランスにある」と結論する。

党機構の項の細目はつぎのとおりである。(1)党員数対策、(2)党の構成と発展、(3)党機構と党の上級指導層、(4)党員の管理、(5)党機構と非党組織の相互作用。

各党員に、思想上・組織上の原則を身につけさせる主要なテクニックが、学習である。ここでは党員および幹部の教育の内容、またそれがいかに組織的に行なわれているか（ことに党学校および小組）が説明される。また党員や幹部がそれによって集団主義と党のリーダーシップを承認することになる重要なテクニックとして、「総括」と「批判と自己批判」の方法が語られる。ついで党員および幹部訓練の最近における発展、さらに学習と大衆運動の関係では、「問題がより鋭利になり、革命運動における決定的な新しい段階が生起するとき、学習はキャ

ンペーンに拡大される」点を指摘し、しかも1957年以來いくつものキャンペーンが重複して展開された結果、それは特別の、とっておきの武器ではなくて、リーダーシップの通常の用具になったという。と同時に整風運動が党内から党外へと拡大された点をも指摘する。また、「学習は支持者の教化に役立たせられるだけでなく、大衆運動の形式をとることで、中国の大衆路線リーダーシップの主たるテクニックになった」と。

党の活動と幹部の項では、党の活動の原理を「実践論」と「矛盾論」に求め、前者が民主集中制に含まれる民主の側面に基礎を与え、後者が集中の側面に基礎を与えるという、これまたユニークな見解を示す。その項で注目すべき点は、党および政府の指導層と大衆との間に介在し、党の政策を実際に遂行するものとして、幹部の役割をきわめて重視する点である。党の組織の強さと柔軟性は、ことに生産レベルの幹部にどれだけ民主集中制の原理を強調するかにかかっているという。1959年以來の危機にも、党の首脳部は、党の活動のテクニックと生産レベルの幹部への信頼によって対処しえたとする。

つぎに著者は、一模範公社（建明人民公社）に例をとることによって、基層組織におけるリーダーシップの問題を検討する。また基層組織における党組織と行政機構の関係について述べ、さらに57年以來の幹部の「下放」の意義と、その際に下放幹部が大衆を指導するために採用した方法、すなわち「試験田」、「現場会議」等にふれる。最後に、公社の生産隊におけるリーダーシップに言及し、そこでは他のリーダーシップとは異なる「家族支配のリーダーシップ」(family-dominated leadership)を示唆する。

そこで、中国社会を改造するにあたって、どんな伝統的な習慣や行為がこれに利用され、また革命に反するものとして否定されたかがつぎに問われなければならないという。中国社会にあつては、血縁、友人、出身を共通にすること、共通の経験（同学）などによる紐帯がきわめて強固であり、各人は社会秩序のなかで比較的固定した位置を占める。この点は他の家父長制的農耕社会とそれ程異なるわけではないが、ただ儒教が道徳的な正当化、人格的な正義の保証、連帯の観念を与えたという。中国人は、「各人からの“社会的距離”を測定する“物差し”ではかられた社会的紐帯の親密さによって」、こうした社会関係をみた。このような社会では、政治的關係は一般に社会的な關係の範圍の外にあり、そのことは一方で官僚制が親密な社会集団に浸透することを阻止すると同

時に、他方官僚制内では最少限の政治的義務も社会的距離によって妨げられ、また官僚制内に親類・縁者等を集めることによって腐敗させられた。しかるに中共は、指導者と被指導者の間の徹底せる相互関係に基づく国家権力についての首尾一貫せるイデオロギーを持ち込み、そうすることによって、親密な、または face-to-face な社会集団に浸透することは可能だが、これらの集団内から負担を課するような圧力には抗しような活動原則を形成した。しかも中共は、「礼貌」のパターンから有用な習慣を選択し、これを強調することによって、社会的な義務を再強調することに努めた。「党の大衆路線は政体と社会を結合させ、しかも政治的指導者が政治目的のために社会を操作することを可能ならしめる、新しく理想的な社会関係のプロトタイプと考えてよいであろう」。いまや以前の「礼貌」結合にかわる、学習と生産のための小組にみられるような、新たな対面関係が形成されつつあり、そこでは、「新しい共通の忠誠および義務……それはいったん産み出されると強制を必要としなくなるのだが……は基本的には“人民”の一員および中国人としての一体感に由来するものである」。続いて共産主義社会における民主集中制の問題について述べ、さらに民主集中制が目標であり、大衆路線が手段であるとして、両者は相互に補完しあうものといった見解を示す。

結論において著者はつぎのようにいう。「中国において直接に観察する機会がないので、大衆路線の理想がどの程度実現されており、したがって中国の人民を動員し強化するためにどの程度脅迫と暴力よりも説得が用いられているかは、わたくしにはわからない。けれども、中国の指導者たちが大衆路線の工作方法と作用を、現実的で必要な目標とみなしていないという誤った想定に達するべきではない」と。また著者は、中国におけるリーダーシップの問題点として、つぎの点を指摘する。すなわち、急速に変化する社会状況によくリーダーシップが適応するかという問題と、同一の問題の他の側面ともいえるが、リーダーシップの統制と発動された大衆の感情をバランスさせる問題、さらに、「人民のすべてが同じ理論的な程度にまで高められ、同一のことに動員されるならば、意見の不一致が存在しなくなるだけではなくて、不一致の欠如そのものが比較的能力をも奪うことになる」ともいう。しかしながら著者は、「中国共産党のリーダーシップの最大の資産が、党の30年の歴史を通じて検証された明示的・実際的な活動力のテクニックにある」といい、「戦時のテクニックを経済建設に用いる問題を別にすれ

ば、これらのテクニックが、意識的に創造的であって機械的でないやり方で用いられるときは、大衆の支持をえ、社会主義へ向かって明らかな前進を促すことが、なお期待されうる。党が新たな経験で学んだ教訓の結果、初期のテクニックを進んで修正するならば、ことにしかりである」と結論している。

III

中国共産党の著しい特徴がその指導原理にあり、したがって、そうした指導原理がいかに実現されているかを知ることに著者の狙いがあることは、すでに述べた。そのために著者が、毛沢東の認識論、さらには共産主義的精神の究明から始めたことは正しい。また中共の思想といえはとかくイデオロギーの一語で片づけるか、せいぜい毛沢東思想にはオリジナリティがないという評言にとどまる傾向のあるアメリカの中国研究者の間にあつて、中国の思想とまっこうからとりくもうとする新進学徒の出現は、今後のアメリカの中国研究に新たな進展を期待させるものではあるまいか。しかしアメリカにおいて本書が、「おそらくは神秘的で不可解な中国の支配者たちを理解しようという関心を有するすべての人々にとって大きな価値がある」(*The American Political Science Review*, Vol. 1, LVII No. 4, 1963) としても、中国共産党の思想がかなり大きな注目を集めている日本にあつては、若干事情が異なるといわねばならない。

著者の中国共産党の思想に対する理解には、きわめてユニークな、時にはいささか突飛とも思えるような点がみられ、疑問なしとはしないが、ここではそうした個々の論点にはふれないことにする。ただ評者にとって、中国共産党の思想を理解する上でキー・ポイントをなすものと考えられる「整風運動」の評価が、十分でないように思える。というのは、肉体労働(生産労働)と思想点検とを結合させる整風運動の方式が、中国共産党の個性をかたち作るものとみられているからである(新島淳良、「中国における近代」、『思想』、1963年11月)。中国共産党はこうした方式によって最も徹底した思想改造を行ない、かくて党員や幹部が真に人民大衆の側に立つことを可能ならしめようとしている(もちろん、この点についてなおいっそうの理論的究明が必要であろう)。

ところで、中国共産党は、一面において思想改造によって党員や幹部が真に人民の利益を代表することを可能ならしめると同時に、他の一面では大衆路線の工作方法をとることによってこれを保証しようとしている。した

がってここでは、大衆路線とよばれる工作方法が、スターリン時代のソ連にみられたような権力の側の墮落・変質をよく阻止しうるかといった視点が必要となろう。しかもその場合のソ連における問題は、単に一部の指導者が恣意的な専制をしたということにあるのではなくて（個人崇拜だけが問題ではない）、指導者と大衆の間に決定的な乖離を生じた点、より具体的にいうならば指導者が生産力の発展に照応したソ連社会の変遷を十分に把握しえなかった点にあるのではなからうか。ところで中国における大衆路線の工作方法にはそれが認識論の三つの段階に照応するという点で、理論と実践の統一をはかるといった側面とともに、その主要なテクニクとして、反右派闘争や大躍進政策というようなさまざまなキャンペーンを展開することによって、いわば権力の思想と大衆の思想が一致する状況を意識的に作りだすといった側面がある。そうした意味をもつキャンペーンは、不断・無限のものでなくてはならないが、それがマンネリ化しないためには、常に新たな任務を提起する必要がある。しかし、よりいっそう困難な問題だと思われるのは、こうしたキャンペーンに際して、往々にして過去の偉大な革命的伝統への志向があまりに強調された結果、リーダーシップが生産力の発展に照応した社会の変動を適確に把握しえないか、または後向きのまま社会を固定させることになりはしないかということである。しかも、後進国的な母斑を多く残している中国のような社会において、前近代から近代を超越して非近代へといった図式があまりに安易に信じこまれるとするならば、ことにそうであるといわねばなるまい。ところで著者も、過去において有効であったリーダーシップのテクニクが、現状に即しえなくなる場合についての示唆を与えてはいるが、社会主義国のリーダーシップを考える上で不可欠だと思われる上記の視点が、なお明確でないといわねばならない。

しかしながら、中国におけるリーダーシップを、ソ連との比較において論じようとするのであれば、究極的には毛沢東思想をマルクス・レーニン主義の系譜の中でどう位置づけるかという問題にまで進まざるをえないであろう。さらには、中国の伝統思想、なかんずく中国における「人民概念」（西順蔵、「中国近代思想のなかの人民概念」、『講座近代アジア思想史：中国篇』参照）と「マルクス・レーニン主義におけるプロレタリアート」の概念との異同といった視角も必要かもしれない。しかし、それよりも先に本書の著者に問わなければならないのは、

著者の中国に対する姿勢である。たしかに著者は、中国における指導者と大衆との関係を、むしろ大衆の側からの能動性にウエイトをおいてみようとしており、そのために著者は、中国共産党の思想と工作方法を、究明しようとした。しかし、所詮は、後進国である中国のリーダーシップを理解しようという枠組の中でのことにとどまるといえよう。

最後に本書に対するマイナスの評価として、リーダーシップが現実はどう機能しているかという事実の追求が不十分だと指摘が一般になされているようである。ただ、その場合、そういった批判の多くのものに、中国共産党のリーダーシップがあたかもその思想とは無関係に遂行されているかのような想定があることは問題である。そうはいっても、また資料面での制約がきわめて大であることを認めたととしても、こうした評言をまったく否定することはできないであろう。

（調査研究部東アジア調査室 小林弘二）